

Title	ロシア語史概説(2) : 序説
Author(s)	石田, 修一
Citation	大阪外国語大学論集. 2 p.1-p.16
Issue Date	1990-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79476
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ロシア語史概説 (2) (序 説)

石 田 修 一

Очерк по истории русского языка (2)
(Введение)

Сюити ИСИДА

V. Гипотеза А. А. Шахматова и ее оценка

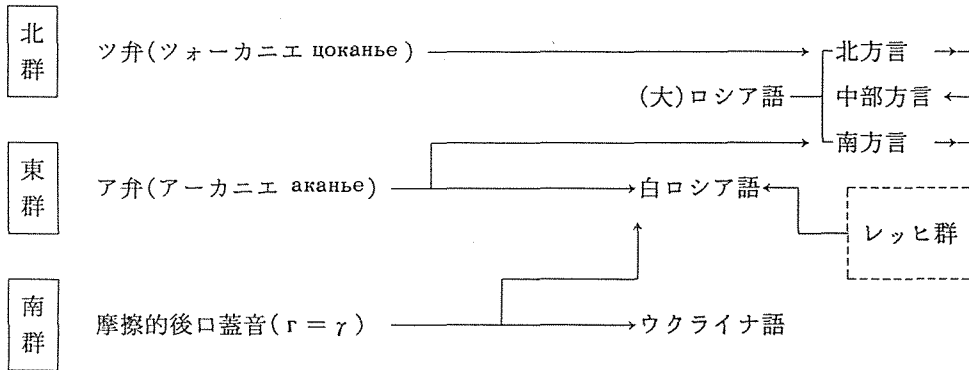
VI. Этнонимы в 《Повести временных лет》

(V) シャフマトフ仮説とその評価

フィリンも評価しているように、「シャフマトフは古い印欧語の祖先から始まって現代に至るまでの東スラヴ民族 (народность) とその言語に関する概略図を提示した最初の学者であった」⁽¹⁾。すなわち、言語史と民族史の総合である。したがって、東スラヴ人と東スラヴ諸語の歴史を扱った諸研究が決まってシャフマトフ説の記述から始まるのは故無くしてではない。ただ19世紀末から20世紀初頭にかけての四半世紀の間、彼はその構想の細部においてしばしば修正を行ったため、例えば前述の南、東群の種族構成の記述においてその諸論文が常に一貫している訳ではない。そのことを考慮した上で、その基本構想を図式化すれば以下になる⁽²⁾。

この仮説に対してスラヴ学者ヤギチ (Ягич, И.В.) はシャフマトフに宛てて、「貴下のロシア方言 (русские наречия — ここでは東スラヴ語を指す—石田) 分類論は興味深く拝読しました。貴下のお説は全てにおいて私を直ちに納得させた訳ではありませんから災いは大きくはありません。貴下は古代ルーシの政治機構の形成過程における種族関係に余りにも大きな意義を付与し過ぎているではありませんか? 一体曾て太古の時代に三群だけが、しかも段階的移行、中間的媒介を経ずして存在したなどということがあり得ましようか?! 今後の研究は必ずや三群だけではなく

遙かそれ以上の多数群を認めることになると思われます」という書簡を送っている⁽³⁾。



その後もシャフマトフ説は多くの批判を受けたが、概ね歴史文法が例示する評価は次の諸点である⁽⁴⁾。①北ロシア方言対南ロシア方言間の差異は現在の三大東スラヴ諸語を分かつ一連の特徴以上に古い、という観点は妥当である。例えば後口蓋音 (g) の破裂音 (閉鎖音) 的調音 (北ロシア方言) と摩擦音の調音 (南ロシア方言) の差異は⁽⁵⁾、弱母音消滅後 (凡そ12世紀以降) 新たに発生する〔子音 + j〕結合を長軟子音として引き継いだウクライナ、白ロシア語と短軟子音のまま引き継いだロシア語の差異以上に古い現象である (〔子音 + j〕結合は、スラヴ語では所謂ヨット化 (йотация) を受けて原初軟子音 (исконносмягченные согласные) に変質した: [例] *svetja > свеча (ロシア語) свіча (ウクライナ語)、свечка (白ロシア語)、свѣща (古スラヴ語)、świeca (ポーランド語)。この場合東スラヴは全て同一結果を持つ。ところが、弱母音消滅後再び発生して来た〔子音 + j〕結合の処理の仕方では、ロシア語はウクライナ、白ロシア語との間に差異を生じるに至った。ウクライナ語や白ロシア語は〔j〕を吸収して軟化するだけでなく、長音化したのである。[例] plat' ъje > plat' je > платье (ロシア語) плаття (ウクライナ語)、плаця (白ロシア語)。②中部ロシア方言は南北のロシア方言の混淆の環境が整う中央集権国家にして初めて可能であったのだから、かなり新しい時代の産物であるとする見方も正しいものである。しかし、③ア弁 (アーカニエ、広義には無アクセント音節の母音 [o, a; e] の弁別を持たない方言) は弱母音消滅以前には考えられず、まして東スラヴの種族方言 (特にヴァチチ族方言) に結びつけることはできない。アーカニエの現象は無力点母音の弱化現象であるから、通常以上に弱い管の弱母音も消えない間に通常の強母音が弱化することは論理的にあり得ない。先ず弱母音の弱化が起こり、次いで強母音の弱化が起こる筈である。また、所謂「強い位置」弱母音起源の [ъ > o; ь > e] と原初的な [o, a] 母音の間には、アーカニエの結果において差異がない。[例] тънька > тонка (tanka) と вода (vada)。さらに、アーカニエにとって、決定的に重要なアクセント直前母音の位置は「弱い位置」弱母音の消滅以後生起する直前位置である: [例] къ мнь > ко мне (kamn' e) ; въ водъ > в воде (vvad' e)。この点で最も綿密な検討を行ったのが

アヴァネソフ(Аванесов, Р.И.)である(1947年「ロシア方言の中でのロシア語成立の諸問題 Вопросы образования русского языка в русских говорах」—モスクワ大学通報, №9)。^④ツ弁(ツォーカニエ [ѣ] と [с] の弁別を持たない方言、〔例〕 въчь → вѣще; половьць → половьчь)は11世紀のノヴゴロド文献にも見られる程確かに相当古い現象であるが、北方言全域に亘る訳ではない。少なくともクリヴィチの子孫が居住したロストフ・スズダリの地には見られない。ところが、南部(リャザン州北部)で行われており、しかもこれは北部からの影響ではなく土着のものである。^⑤現代ソヴィエト考古学も人類学も年代記伝説に基づく、ラヂミチ、ヴァチチのレッヒ群説(Радимичи бо и вятичи от ляховъ「ラヂミチとヴァチチはリャヒから出ている」)^⑥を完全に否定しており、現代白ロシア人の祖先はシャフマトフの考えたラヂミチよりはむしろクリヴィチやドレゴヴィチである。また、白ロシア・ポーランド共通の言語特徴はかなり後の接触関係によるものである。^⑥シャフマトフ説の欠点は反歴史主義であり、「東スラヴ人の実際の歴史と言語史の諸問題との切り離し」^⑦である。原始共産制の崩壊と階級関係の出現、封建国家の成立と封建的分割の時代といった要素は種族的な社会組織を瓦解させ、地域方言を形成させていった筈であり、現代東スラヴ語を直接古い種族方言に結びつけることはできない。

歴史文法が記述するシャフマトフ批判は概ね以上の諸点に纏められるが、ハブルガエフ(Хабургаев, Г.А.)によれば、これらの批判は概して「説の個別的側面に関するもので、その根幹に触れたものではないのである」^⑧。そして個別的な事項に関するシャフマトフの推定とその修正は、19世紀末から20世紀初頭にかけての人文科学の状況の反映、すなわち東スラヴ語の体系的な言語地理資料の欠如と「原初年代記」だけが唯一の古代東スラヴに関する史料であったという状況の反映として見るべきだとしている。シャフマトフ説の根幹に触れる反論が現れるのは、言語地理学と考古学が十分な資料を提供することが可能になった戦後のことである。例えば言語地理学の資料を基にしたアヴァネソフ(Аванесов, Р.И.)の研究(1947年の「言語学の諸問題」誌に掲載された上記論文に始まる一連の研究)もその例である。しかしハブルガエフによるシャフマトフ評価はアヴァネソフの「反歴史主義」という評価とは異なり、シャフマトフ構想の基本原理解は言語史と民族史の切り離し、歴史過程に合致しない純言語的解釈を行わない、ということに尽きる^⑨ということになる。

かくして、ハブルガエフはシャフマトフ説を二つの前提に立脚するものとして総括している^⑩。それは、先ず第一に、現代東スラヴ諸民族とその言語は古代ロシア末期頃、すなわち古代ロシア民族とその言語の崩壊期頃(13—14世紀頃)迄に出来上がっていた方言・民族群を基に成立したものであるということ、第二に、その後期古代ロシアの方言・民族群は「原初年代記」が記録している東ヨーロッパのスラヴ語族の地域的連合体として成立したものであるから、その方言特徴はそれぞれの連合体に属した種族の方言特徴によって規定されるものであるという前提である。そしてこれはシャフマトフ自身の推定というよりは19世紀末—20世紀初頭のロシア歴史言語学の共通認識ないしは到達点とも言うべきものであった。この二つの前提を基に、上の三つの方言特

徴を当時の言語地理資料に当てはめて観察・推理した結果の論理的帰結がシャフマトフ説である。してみれば、この前提に妥当性あるのか、その検証こそがこの問題の基本だということになる。そして、第一の前提について言うならば、現代東スラヴ諸語は古代ロシア末期頃に出来上がっていた方言・民族群を直接的に継承して生成した結果ではなく、それを再編して作り上げて来たものだということ、すなわち現代東スラヴ諸語の歴史は古代ロシアの方言群の生成の歴史ではなく再編の歴史であるということ、第二の前提に対しては、後期古代ロシアの方言・民族群は古代ロシア以前の種族連合の分布域によって予定されたものではなく、封建的分領期の間に生成されて来た各領域の言語変化・言語改新が局地化した結果である、というのが今日大方に認知されている結論であると思われる。以下においてはこうしたロシア語成立過程について更に具体的に記述しておくことにする。

なお、東スラヴ人と東スラヴ語の起源についての研究は勿論シャフマトフやアヴァネソフ以外にも見られる。例えばレル・スプワヴィンスキ、トルベツコイ (N. Trubetzkoy) は最古の東スラヴ語の南北二元説を主張している。そして、レル・スプワヴィンスキはその北群と南群に対して、地理的には古代ルーシの二つの政治的・文化的中心であるノヴゴロドとキエフを、その音声学的特徴としては北群に [g] 南群に [ɣ] を当てる。またトルベツコイはその音声学的特徴として [g] と [ɣ] の対立以外に、二つの閉鎖音 [ɔ] と [c] の弁別を行なう南群とその弁別を持たない (ツ弁) の北群、*tl, dl を [l] によって継承する南群と [kl, gl] に変えてしまう北群 (例、povedli > повегли) 、等の区別を行なっている。フィリンは、この分野の研究の学説史を書いているが (「古代ロシア方言とロシア語、ウクライナ語、白ロシア語の起源に関する論争史から」)、その中で、レル・スプワヴィンスキに対して「シャフマトフ説の弱点の指摘においては妥当ではあるが、シャフマトフの構想から大きく掛け離れている訳ではなく、この二つの仮説の差異はただレル・スプワヴィンスキにはシャフマトフ的大胆さと創意がないにすぎない。ロシア語、ウクライナ語、白ロシア語の成立過程の問題でも甚だ不十分で、シャフマトフ説に比べて一步後退である」と評している⁽¹¹⁾。更に、フィリンはトルベツコイに対して「その図式には大きな弱点があり、現在では研究史としてだけしか意義を持たない。この構想の特徴は、事実から引き出すのではなく、予め作った『モデル』に事実を嵌め込むことにある。事実が『二項対立』論に従属されており、それは『波動説』 (wave theory) をバックにしたものである」という評価を与えている⁽¹²⁾。

(Ⅶ)「原初年代記」に現われる東スラヴの民族名をめぐって

(1)「原初年代記」の伝える東スラヴ人情報はヴィザンツの文献その他によっても確認することができる。例えば、10世紀のヴィザンツ皇帝コンスタンティノス・ポルフィロゲンネートス7世 (Κωνσταντίνος Πορφύρογεννης, 905—959 ロシア語では、

「王統紫衣のコンスタンチン」を意味するカルクを用いてコンスタンチン・バグリャナロードヌィー Константин Багрянородный ないしはコンスタンチン・ポルフィラロードヌィー Константин Порфирородный, また時にそのままコンスタンチン・ポルフィロゲネート Константин Порфирогенет)の「帝国統治論」(De administrando imperio, 948-952)においても、ドネプル水域にあった東スラヴ人、クリヴェータイエーノイ、クリヴィトゾイ (Κριβεταίηνοι, Κριβεταίοι)、ドルグヴィタイ (Δρογγοβίται)、セルヴィノイ (Σέρβηνοι)、デルヴレニノイ (Δερβλενίνοι)、フルティノイ (Οὔλτινοι)、即ちクリヴィチ、ドレゴヴィチ、セヴェリャネ、ドレヴリャネ、ウリチについて伝えている。なおここには、ヴェルヴィアノイ (Βερβεάνοι)、レンザノイ (Λενζάνοι)、レンゼノイ (Λενζέννοι) といった「原初年代記」にはない名称が見られるが、ヴェルヴィアノイ=デルヴィアノイ (Δερβεάνοι)=ドレヴリャネという推定がある他は不明である⁽¹³⁾。例えば「帝国統治論」の次のような記事にも上に言ういくつかの名称を見い出すことができる。「このロス達の冬の暮らしはかくも厳しいものがある。11月が来ると、彼らの公達がすくさまロスの者全員を引き連れてキエフを発ち、ギラと呼ぶ徴貢巡行に (εἰς τὰ πόλιν δέχα, ἧ λέρετα γύρα)、即ちヴェルヴィアノイ、ドルグヴィタイ、クリヴィトゾイ、セルヴィノイといったスロヴェネの地やロシ達に貢物を納めているその他のスロヴェネの地へ向けて出発するのである。彼らは一冬の間そこで糊口を凌ぎ4月になってドネプル川の氷が融けると再びキエフに戻るのである」(ロシア語からの重訳)⁽¹⁴⁾。

コンスタンチノス・ポルフィロゲネートスは以上のような東スラヴ人情報を「原初年代記」の編者(ネストル他)に先立つこと凡そ150年以上も前に知っていたことになるが、「原初年代記」の編纂自体がそれに先行する時代の、現存しないいくつかの個別的な年代記集成(своды) — 「最古集成(Древнейший свод)」「(11世紀30年代末)」、「ニコン集成(Свод Никона)」「(1073)」、「原初集成(Начальный свод)」「(1093-1095) — 等の断片を基にして⁽¹⁵⁾、その積み重ねの上に成立していることを思えば、古くからの東スラヴ人情報が時間的・空間的・掘りをもって語り継がれていたことが分かるのである。

考古学者トレチャコフ(Третьяков, П.Н.)も、紀元1000年紀半ばと後半の考古学的資料に照らせば、「原初年代記」の大部分の種族は決して新しい組織名称ではなく、長期の歴史を経た人種的にも独自の住民群であり、その種族の多くは4-5世紀、場合によっては3-4世紀から考古学的資料によって追跡できるとして次のように述べている。「ポリャネ、セヴェリャネ、クリヴィチ、ヴァチチ、スロヴェネ、そしてその他いくつかの東スラヴ諸種族はアント連合の発生のはるか以前から存在し、またその諸種族の一部、すなわちより南より地域の種族はアント連合の成員であった。彼らはアント連合の崩壊後も存続したが、それはアント連合とは異なって、決して一時的な軍事・政治組織ではなく、地域の共通性と種族・氏族関係の伝統と文化的特徴、そして明らかに言語によって内的に結びついた、統一した揺るぎなき住民群であったからである。…勿論、

紀元1000年紀後半にはこれは最早決して原始的な種族ないしは同系種族連合ではなく彼らの内部構造はその古い様相を失いつつあった。種族・氏族関係は現実性を失い、生産活動とは無縁となり、その関係が存続したのは恐らくは祭祀面だけであつたろう。生産活動の面では地域的、共同体的な関係が種族・氏族関係に取って替わっていた。…紀元1000年紀末頃のクリヴィチ、ヴァチチ、スロヴェネ、ドレヴリャネ、トレゴヴィチ等に対しては『種族』(племя)という用語を当てるよりは(因に年代記もこの用語は使っていない)、『小民族体』(небольшие народности)ないしは『小民族』(народцы)と呼ぶ方が適切であろう⁽¹⁶⁾。すなわち「原初年代記」の記録する種族名は古い起源を持つものもあるが、その実態は年代記編纂時点においては既に変質しており、これらの名称は種族というよりは種族連合体(племенные конфедерации)であつたり、また血統的基盤の薄い地域連合体を表していたことになる。

(2)さて、「原初年代記」の記録する東スラヴ族(種族、種族連合体)の名称は15種である。すなわち、ドゥレビ、ブジャネ、ヴェリニャネ、ホルヴァティ、チヴェルツィ、ウリチ、デレヴリャネ、トレゴヴィチ、ポリャネ、セヴェル(セヴェリ、セヴェリャネ)、ヴァチチ、ラヂミチ、クリヴィチ、ポロチャネ、スロヴェネ(дулебы, бужане, вельняне, хорваты, тиверцы, уличн, деревляне, дреговичи, поляне, север[северы, северяне], вятичи, радимичи, кривичи, полочане, словене[новгородцы])である。ただし、ポロチャネがクリヴィチの一部であり(「他の権力がポロタのはとりにあったが、そこにはポロチャネがいた。彼からクリヴィチが出た」)⁽¹⁷⁾、ヴェリニャネ=ヴォリニャネがドゥレビに、そしてブジャネにとって代わったという年代記の記事(「ブジャネというのは彼らがブグ川に沿って住んでいたからであるが、後に彼らはヴォリニャネと呼ばれた」)⁽¹⁸⁾、「ドゥレビはブグ川に沿って暮していた。いまそこにはヴォリニャネがいる」)⁽¹⁹⁾を考慮すれば、既述の如く12種の名称が数えられることになる。

しかし、これらの名称には、キエフの年代記編者にとって既に過去の伝説に過ぎず、種族としては解体していたものも、彼らの時代の、すなわち、古代ルーシ(Древняя Русь)の成員となった同時代の方言・民族群の名称も含まれていると考えられる。したがって、これらの名称は造語法の点からも、語基の面からも様々のものが含まれるのである。例えば、今上に上げたドゥレビに関する記述、あるいはアヴァールの襲撃に苦しむドゥレビ族の記事は(「この時代にはアヴァールも現れ、…スロヴェネであるドゥレビを苦しめドゥレビの女たちに乱暴をした」)⁽²⁰⁾、年代記編集者自身がドゥレビを過去の伝承上の存在としてのみ捉えていたことを示している。この点では、年代記がドネストル水域沿いに住みドナウにまで拡がっていたとする⁽²¹⁾(写本によっては、ウリチはキエフ以南ドネプル中域にあったが、イゴリとの先頭の後ドネストルへ退却した、とする⁽²²⁾)、ウリチ、チヴェルツィもまた同様である。

ハブルガエフの「『原初年代記』の民族名称学」は、ウリチがチャスミン・ブグ遺跡の担い手の一部であり、ヴィザンツの作家にはアンタイ(Антай)に聞こえた(したがってスラヴ人

にはウティ、ウチチ *УТ-Ы, *УТ-ИЧ-И が推定される)黒海北岸の住民の名称から作ったものだとしている。チャスミン・ブグ遺跡は6～7世紀にかけてドネブル・ドネストル間にあったスラヴ人の遺跡であり、ヨルダーネス等がアント人に当てた地域の東部に相当し、アント文化だとされる。この遺跡はドネブル右岸支流であるチャスミン川(Тясмин)沿いにまた南ブグ川(Южный Буг)沿いに集中しており、ペニコフカ式土器(丸銅形とソロバン玉形の土器⁽²³⁾)を出土し、チェルニャホフ文化(2～4世紀、黒海北岸の多言語種族を統合したゴート王国の考古学的反映であるが、その居住民の主たる構成者はスラヴ語族であった可能性が強い⁽²⁴⁾)との接点が見られるという⁽²⁵⁾。また、6世紀のヴィザンツでアント人(アンタイ)と言われていたのはドナウ以西バルカン半島のそれであって、ドネブル中流域つまりチャスミン・ブグ遺跡分布圏のスラヴ人ではないが、この両者の間には繋りが考えられるのである。したがって、チャスミン・ブグ遺跡分布圏のスラヴ人の一部はアヴァール来襲以後も森林ステップ地帯に残って、年代記のいうウリチを写本や版によってはウグリチ(угличь)ともウルルチ(улутичь)ともいう名称を残したのであり、名称が様々なのは年代記の時代には既にはるか以前に忘れられた名称であったからであるという⁽²⁶⁾。そしてハブルガエフは、「キエフでウリチと呼んでいたのは、恐らく起源的にチャスミン・ブグ遺跡の担い手に繋りながらも、何かある非スラヴ的要素(この地域では、イラン系、ウゴル系があるが、一番可能性があるのはチュルク系の要素)を吸収した民族群を指していたと考えられる。その非スラヴ的要素はこの民族群に自称を提供し、それが-ич-и形の語基となったのである。換言すれば、年代記のウリチが6～7世紀のチャスミン・ブグ遺跡を作り上げたもの(アント系民族群の一つ)の直接の後裔であるとするならば、年代記に現れるその名称はロシ川以南のスラヴ語族の上に重なる上層(superstratum)民族の名称から作ったものであり、それと6世紀後半のヴィザンツの諸文献にアンタイ(Ἀνταί)の形で現れ、しばしばチュルク系語根に遡るとされる民族名との関連を仮定することができるのである」と結論している⁽²⁷⁾。ここではウリチが既に過去の種族の名称であり、古代ルーシの直接的成員ではなかったということと共に、ドネブル・アント人との間の点と線とも言うべき繋りを注視しておきたい。

また、チヴェルツは、チュルク系遊牧民の一部が基幹部隊を離れて、ドネストル中・上流域に定住し始め、次第にスラヴ化したものであり、そうであればこそ古代ルーシの年代記の時代には二言語併用住民として雇用され、年代記は907年の記事として、オレグ公がヴィザンツ遠征時に他の東スラヴ族と共に「通訳(толковины、リハチョフの現代語訳は толмачи)であるチヴェルツィを連れていった」と書くのである。それ故、チヴェルツィ(тиверцы, тиверьци)なる名称は、スラヴ化したチュルク語族の末裔であるチュルキ(тюрки < tüürik) (複数形チュルツィ тюрци、チウリツィ тиурьци)のスラヴ的な音表現だという(ツィ-ц-иという複数形自体は、-к- > -ц-のスラヴ的口蓋化)⁽²⁸⁾。さらに、ネストルが「ウリチ、チヴェルツィはドネストルに沿って住んでおり [съядху]、ドナウにまで広がり住んでいた [присъядху] …彼らの町は今も残っており…グレキから大スキタイと呼ばれていた [ся зваху]」とする記事は、当時すでにこの民族名を持

つスラヴ族が存在しなかったことを明確に示しており、それはここに使われているインパーフェクト（未完了過去）の形によっても確認できるとしている（他の場合はアオリストか現在形）⁽²⁹⁾。

次にスロヴェネという名称である。年代記に使用されるスロヴェネには、旧約聖書のヤベテの種族から出たスロヴェネがドナウ川水域に定住し、やがて各地に分散していったとされるスラヴ人一般を指す場合（したがって、古スラヴ語に繋る文語起源のタームである）の他に、「スロヴェネはまたイルメリ湖の周辺に住み、その名で呼ばれ（*прозвашася своимъ именемъ*）、町をつくってそれをノヴゴロドと名付けた」⁽³⁰⁾という東スラヴ族としてのスロヴェネがある。この導入部の、ドナウからのスラヴ族分散の記事においては、東欧各地に散ったスロヴェネのそれぞれの入植地と新たにそこで得た民族（種族）名が列挙され、場合によってはその民族名の由来も示されているが（例、ドネプル流域－ポリャネとドレヴリャネー森の中に住んだから／ドヴィナに流れ込むポロタ川流域－ポロチャネーポロタの水名により、等）、イルメリ湖（イリメニ湖）周辺にあったスラヴ人だけは独自の名称が与えられず、スロヴェネのままであり、しかもノヴゴロドという町との関係だけは強調されている。一方、古代ルーシ国家の成員としてのスラヴ方言・民族群を列挙する時だけはノヴゴロドの町のスロヴェネは「ノヴゴロド人」と呼称されるのである。以下、年代記から二箇所の引用を行なう。

「ただ次のものだけがルシにおけるスロヴェネの民族である。すなわちポリャネ、ドヴレリャネ、ノヴゴロド人、ポロチャネ、ドレゴヴィチ、セヴェル、ブジャネである。（ブジャネというのは）彼らがブグ（川）に沿って住んでいたからであるが、後に彼らはヴォルィニャネ（と呼ばれた）」⁽³¹⁾（ただし既述のごとく、またこの引用箇所を示されるようにブジャネだけは古代ルーシの成員ではなく過去の種族である。）

次はすでに以前に引用したヴァリャーギ招致伝説の箇所である。「三人の兄弟が自分たちの種族と共に選び出され、ルシのすべてをつれて到着した。…これらの者からルシの国が呼び名を得たのである。ノヴゴロドの人々－これらはヴァリャギの氏族から出たノヴゴロドの住民であり、（ノヴゴロドの住民は）以前はスロヴェネだったのである。…その町にとってヴァリャギは外来者であり、ノヴゴロドの最初の住民はスロヴェネ、ポロツクではクリヴィチ、…であった」⁽³²⁾。

ここからは、ノヴゴロド周辺（イリメニ湖、ヴォルホフ川水域）に入植したスカンジナビア人ールオトシ（Ruotsi）ーが、当該地域周辺のスラヴ人によって次第に同化されていった過程が推定されるのである。ノヴゴロドを中心とした政治組織が完成するはるか以前からすでにここではスラヴ・ノルマン間の深い交流・接触関係が進行していたことは考古学資料も確認しており、またヴォルホフ水域のスラヴ人が北欧人種の形質にきわめて近い類似性を示すという人類学の資料も存在している。さらに、古代ロシアの支配層にスカンジナビア起源の名前が広く行われていた⁽³³⁾（リュリクの後継者、軍司令官、オレグ Олегь <古代スウェーデン語Helgi.cf.独heilig; キエフの軍司令官、スヴェネリド Свенельд >古代スカンジナビア語Sveinaldr⁽³⁴⁾）とすれば、ヴォルホフ周辺の、ヴァリャーギであるルシの存在は最早否定しがたいものと考えられるのである。

る。しかし、それにもかかわらず、上の年代記の記事はこの地域一体の主人が誰であり、最終的に政治組織的な主導権を掌握した者が誰であったかを語っている。それはスラヴ語族（スロヴェネ）である。年代記編集者は正にそれを示そうとしたのである。10世紀末～11世紀初頭は古代ルーシの統一国家が最盛期を迎えた時代である。シャフマトフによって推定・提示された「キエフ最古集成(1037-1039)」の編纂は、そうした民族的自覚の高まりの中で、国教、国法を定めるとともに偉大なる民族の起源と歴史を記録するという愛国的な事業であった。したがって、スロヴェネの名称は1036年（ヴィザンツ暦6544年）を最後に、すなわち「キエフ最古集成」の編者の筆になる範囲内で姿を消すのである⁽³⁵⁾。そして、恐らくはもうはるか以前から、まして後のキエフの年代記編者ネストルの時代にはすでにノヴゴロド住民を表す名称としては「ノヴゴロド人」という語以外には知られていなかったにもかかわらず、ネストルもまた文語起源のこのタームを取って使用した先人の愛国的な意図を支持したものと考えられるのである。

15種の名称の中ではほとんど無接辞形で一貫しているのは、ただ一つセヴェルという名称である。特に原初年代記の最古の写本では、古代ロシア語で極めて派生力の強い接尾辞「-ャネ」(-ан-е)を付けた形、セヴェリャネはほとんど現れて来ない。一体こうした民族（種族）名が無接辞形のままであるということ、したがって形態的分節性を欠くということはそれだけですでに古さの証明であると考えられる。ポリャネ（поляне <*pol-）はポリャ（поля）、ヴェリニャネ（велиняне <*velyn-）はヴォリニ（волянъ）ないしはヴェリニ（вельнь）、デレヴリャネ（деревяне <*derv-）はデレヴァ（дерева）等がより古い種族名であったはずである。しかもこれら同語根の地名、民族名がスラヴ各地で現れている。概してスラヴ族の名称の重要な特徴はそれがスラヴ各地で重複して現れていることである。例えばセルビ（сербь）は今日ユーゴスラヴィアのセルビア人と東独のスラヴ少数民族ソルブ人（自称セルブSerb）が継承している。あるいはまたポル（pol-）なる語根を用いるキエフ周辺の東スラヴ人ポリャネとヴィスワ水域のポリャネも同様である。後者の地には今日ポーランド（ポルスカPol-sk-a、本来形容詞女性形、ロシア語ポーリシャ Польша）があるが、両語のポレ（pole）、ポーリエ（поле）は共に「平原、原野」を意味している。セヴェルなる名称についても、それは曾てドナウ下流にも現れている。それはスラヴ祖語崩壊期頃の種族名だと考えられる。原初年代記に現れる東スラヴ人セヴェルの位置は「デスナとセミ（今日のセイム川）とスラの流域」⁽³⁶⁾、すなわちドネプル中流左岸支流域である。セドフ（Седов, В.В.）によれば、ドネプル左岸にはイラン系の水名が多く、セヴェル（север, сѣверь, сѣверо）もまたロシア語の「北」を意味する単語ではなく、イラン系（seu=黒い）であるという⁽³⁷⁾。つまり、この種族連合は一部は黒海北岸ステップ地帯からドネプル支流伝いに森林ステップ、森林地帯に入り年代記のセヴェルになったのであり、また一部はバルカン東部に進入して6世紀ヴィザンツの作家が周辺一帯のスラヴ人をアンタイ（アント人）と総称したドナウ下流のスラヴ人となったものと考えられる。これらは当然すべて起源が同一であるということとともに、古い血縁的な種族関係が崩壊していったことを物語っている。そして考古学がドネプル中流左岸支流に発見する8

～10世紀（古代ロシア国家形成期）の東スラヴ人遺跡ロムヌィ・ボルシェヴォ文化が年代記のこのセヴェル(セヴェリャネ)の位置に相当すると言われている⁽³⁸⁾。ハブルガエフは、「歴史上のセヴェリャネの民族学的特徴は8～9世紀に形成されたもので、ロムヌィ(Ромны) 集落の物質文化に反映している。それは当時すでにほとんど氏族・種族関係の崩れた地域的村落共同体であった。したがって、年代記の時代にはセヴェルというタームはすでに種族連合体の名称ではなく（歴史的には勿論種族時代に遡るけれども）、キエフ時代の二つの政治連合体、ベレタスラヴリ公国とチェルニゴフ公国の領域を占めていた民族学的にも独自性を持ったスラヴ語居住民族の名称であった。それは年代記のセヴェルの位置とロムヌィ遺跡の分布域から明らかである」と解説している⁽³⁹⁾。

(3)ハブルガエフは、言語学の立場から民族名(этноним)を観察している。先ず第一に、一般に原初年代記に用いられる民族(種族)名はスラヴであれ非スラヴであれ導入部の、聖書やヴィザンツの原典を資料とした名称以外は集合名称(—а [—'a] 語尾か *i > —b 語尾、例) литва, меря ; чудь, русь) か複数形であり、東スラヴ人はすべて複数形であるということ、第二に、古代ルーシの成員となった東スラヴ人の名称はいくつかの例外(例えば上に挙げたようなドゥレビ、セヴェル等の名称)を除けば造語法の点から見て三種類に分かれる、という指摘を行っている。つまり語幹(語基)に付加される接尾語は、①「—ャネ」(—'ан-е)、②「—イツィ」(—ьц-и)、③「—イチ」(—ич-и)の三種に限られるのである⁽⁴⁰⁾。

①「—ャネ」。これは居住民の所属地を表すための接辞、つまり「～地の住民」を意味し(例セヴェリャネ—セヴェルの地の住民)、本来は、所謂 *i 語幹に所属地を表す接辞—ен—を付加した結果、語基末子音が軟化して(ヨット化による原初軟子音 *исконносмягченный согласный* に変質・交替して) *—i—en > *—jēn > —'ан-еの変化を受けたと推定される(例 *tjeud—i—s* > чудь の場合、語幹 *tjeud—i—* したがって、**tjeud—i—ēn—* > **tjudiēn—* > **tjudjan—* > чужан-е)⁽⁴¹⁾。しかし、こうした音声学的变化がすでにおおたスラヴ祖語後期頃までに完了していたとすれば、また8世紀以後にも古代ロシア語で自由に強い派生力を持って「—ャネ」なる形が、しかも本来的に *i 語幹でない単語からも派生したとなると(例、ポロタ Полот-а > *по-ло-ч-а-не* 等)、この〔子音交替 + —'ан-〕の形式はスラヴ祖語のものではなく、本来の交替プロセスを忘れた東スラヴ語特有の形態モデルに変わっていたことによる。このことから、先のスロヴェネ(本来 *слов-ьн-е*、しかし *словене* も；文語起源の ѡ (ѡ) を ѡ とも е とも書くのはロシア教会スラヴ語の特徴)というタームが本来文語起源であり、東スラヴ土着のものではないことが一層明らかである(この東スラヴ特有のモデルを適用するならばスロヴリャネ * *словл-ян-е* となったはずである。唇音のヨット化は本来渡り音、所謂 *epentheticum* "l" を伴ったが、この語基にはそれが発生する条件がない)。

さて、年代記の15種の東スラヴの民族名の内「—ャネ」(—'ан-е)の形を有するものは、ブジャ

ネ、ポロチャネ、ポリャネ、デレヴリャネ、ヴェリニャネの5種、そして時間的には後に活発化してくるセヴェリャネを加えて6種である。ハヴルガエフによれば、「ーャネ」の類型は水名起源のものとスラヴ祖語崩壊期の古い種族名を土台にしたものの二種である。すなわち、第一類型は〔水名／都市名＝「ーイスク」(・ьск-) 接辞付き関係形容詞／住民名〕という相関的派生関係にあるもの(例、ブグ Бугъ / ブジスク Буж-ьск-ъ / ブジャネ буж-ан-е)、第二類型は〔無接辞種族名→地名へ転化／-ьск-形容詞／住民名〕という相関性をもつものである(例、ポリャ пол-я→Пол-я / ポリスка (ゼムリャ) Пол-ьск-а[земля] = ポリャの(地) / ポリャネ пол-ян-е)⁽⁴²⁾。ブジャネ、ポロチャネは第一類型に属するが、前者については既述の通り、年代記の時代にはすでに伝承としてのみ知られていた過去の種族名である。後者については「ドヴィナに流れ込むポロタ(Полота)という名の小川のために、その川によってポロチャネと呼ばれた」⁽⁴³⁾と年代記は書いているが、一方で「最初の住民は…ポロツクではクリヴィチ」⁽⁴⁴⁾としており、ポロチャネは純粋な種族名ではなく、すでにポロチスク(現在のポロツク Полот-ьск-ъ > По-лоцк)を中心にし、以前のクリヴィチの一部も含んだ地域的連合体の住民名であったと考えられる。その他ポリャネ、デレヴリャネ、ヴェリニャネは水名に関係なく、古いスラヴ祖語崩壊期頃の無接辞形の種族名から派生したものである(pol-, derv-, velyn-)。一方セヴェルだけが独り年代記の時代まで無接辞形を保存していたということ、更に8～9世紀以後地域住民名として「ーャネ」を付加した形が活発化してくること⁽⁴⁵⁾の相対比較によって、年代記編者は新しい事態の発生、すなわち血縁共同体の解体と地域的共同体の発生に併せて、「ーャネ」の形に新しい意義を持たせたものと推定できる。そして東スラヴにおける「ーャネ」は、血縁的要素とは全く無関係に、当該の土地の住人一般を指す形態モデルとしてニュートラルに使用できる形であったと想像できる。

②「ーイツィ」。一般には年代記の「ーイツィ」が都市名を語基として、氏族・種族的出自とは無関係な、都市を中心にした一定の行政地域居住民を表している(例、ロストフ Ростов-ъ → ロストフの人々 Ростов-ьци; リャザン Рязан-ъ → リャザンの人々 Рязан-ьци)。ただ上にいう15種の中のチヴェルツィ(тивер-ьци > тиверцы)のチヴェルという語基については恐らく都市名ではなく、また上述のような語源研究があるが、最終的には明らかになっていない。さらに、ノヴゴロド人(новгород-ьци)については、少なくとも年代記導入部の、「ただ次のものだけがルシにおけるスロヴェネの民族である。…ノヴゴロド人…」(すでに上に引用)の場合は若干ニュアンスを異にしており、単に当該都市住民の意ではなかろう。古代ルーシの方言・民族群が列挙されている文脈だからである。したがって、ここでは「ノヴゴロドの人々」というニュートラルな意味であるというより、「ノヴゴロド人」という民族群である。また、15種の中には入っていないが、トゥロヴィツィ(Туров-ьци)の場合もトゥロフの町の名から作られてはいるが、この町の名自体は一族の祖トゥルィ(Турь)に由来している。それは年代記自身が書いている(「トゥルィはトゥロフにおいて、自分の権力を持っていた。彼からトゥロフの人々がその呼び名を得たのである」⁽⁴⁶⁾)。したがって、トゥロヴィツィも他の「ーイツィ」とは異なる意義が推

定される。

総括的に述べれば、少数の例外を除いて、「ーヤネ」、「ーイツィ」は概して種族や種族連合体を表したのではなく、氏族・種族関係が急激に崩れつつあった純地域的な方言・民族群を指すか、独自の方言・民族的共通性を作り上げた多言語種族の政治的単位への所属を表したのである⁽⁴⁷⁾。つまり、これらの接辞は血縁的な出自よりは、地域的ないしは行政的なかたまりの所属を表現する形式であったと言えよう。

③「ーイチ」。

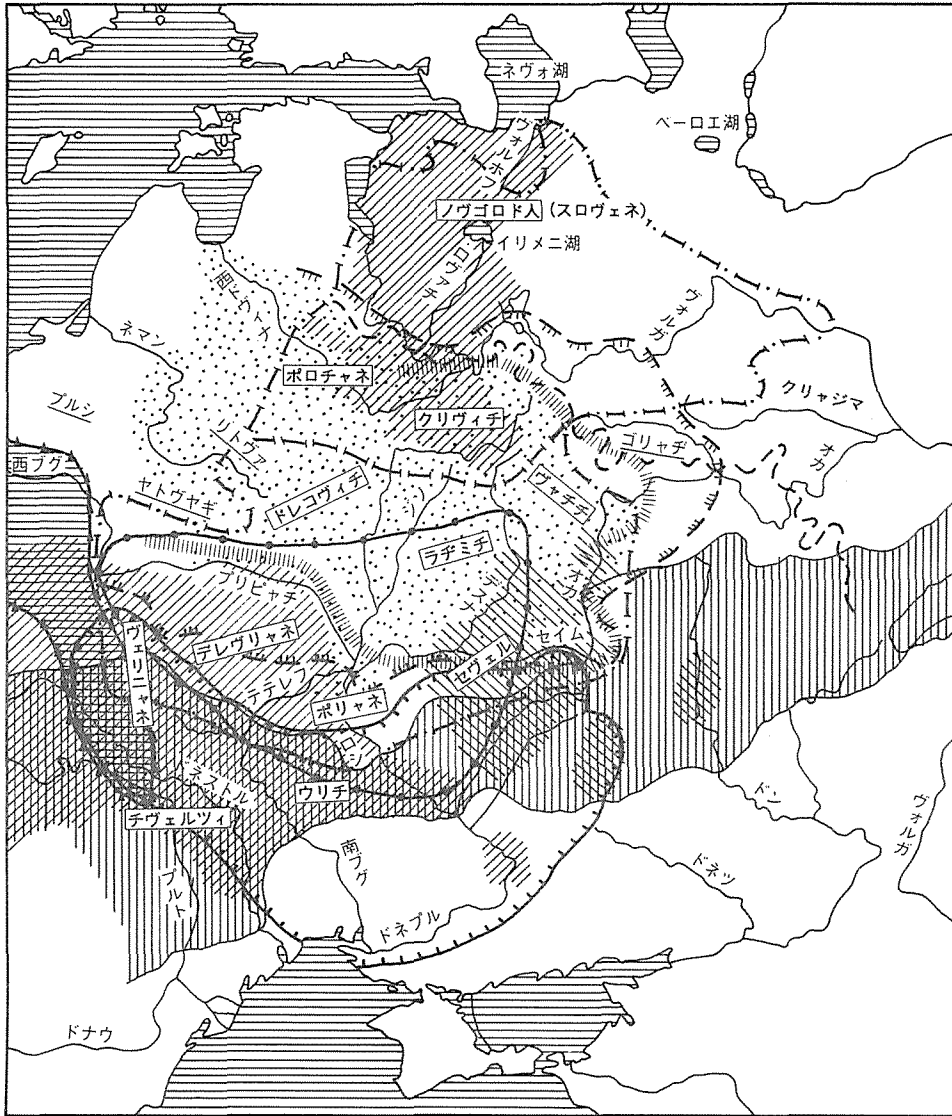
①や②に対して、「ーイチ」は正に血統を表す形式であった。古来父称（父方の血統）を表している（例、ヤロスラフ Ярославъ → ヤロスラヴィチ = ヤロスラフの子 Ярославичъ）。上に挙げた「ーイチ」形は、ヴァチチ、ドレゴヴィチ、クリヴィチ、ラヂミチ、ウリチの5種であるが、ハブルガエフによれば⁽⁴⁸⁾、それ以外にも東スラヴの民族名に通常含まれないチュルク系のベレンヂチ (берендичи) も11～12世紀にスラヴ化して、ルーシの成員になっていた可能性が強く、そのことは考古学的資料とも一致するという。そしてベレンデイ (берендей) 族はチュルク系のはかの種族と共に9世紀のキエフ公国成立期からキエフ国領の南国境沿いにあり、年代記がチュルク系自称 (каракалпаки) のカルクを当てて「黒頭巾」(чернии клобуци)⁽⁴⁹⁾と総称していたものに相当し、その頃からキエフ諸公に仕えていた種族だという。つまり、ベレンヂチはそのベレンデイのロシア化した後裔を表したのである。したがって、「ーイチ」は一般に古代ルーシの成員中の非スラヴ系民族に繋る系譜の表現機能を負ったものだと判断できる。

しかも最も注目すべきことは、ウリチを除く「ーイチ」の民族（ヴァチチ、ドレゴヴィチ、クリヴィチ、ラヂミチ）の居住域（年代記の解説する位置）が、東ヨーロッパの中央森林地帯、すなわち、すべてバルト人スラヴ化地域に限られていることである。地図を一見ただけで、彼らが如何に中心部の広大な地域を占めていたかが分かる。ヴァチチはオカ上流域にあって、西バルト族ゴリャヂ (голяди < *galindis) と隣接しながら、ドレゴヴィチはブリピャチとドヴィナ間、ラヂミチはドネブル上流左岸、ソジ川水域、クリヴィチがヴォルガ、ドヴィナ、ドネブルの源流地点、すなわち「オコフスキーの森」⁽⁵⁰⁾の地域を占めていた。スラヴ人の入植以前こうした中央森林地帯を占めていたのはバルト族である。したがって、これらの「ーイチ」形は、曾ては *vent(is), *radimis, *dreguva, *krie(u)va 等の名称を持って中央森林地帯にあった非スラヴ系民族、とりわけバルトに繋る系譜の表現を行ったものである。このバルト人スラヴ化地域ではスラヴ遺跡はスラヴ人以前の遺跡の上に重なる形で、8～9世紀以後になってやっと現れてくるのである。ハブルガエフは、早くから発達したポロツクの地に比較的近いクリヴィチ（「彼らの町はスモレンスク」⁽⁵¹⁾）以外の「ーイチ」形の方言・民族群は古代ルーシの主要な文化的・経済的中心から外れており、相当期間村落共同体の集落として残ったはずだとしている。このことは、年代記からこれらの名称が消える年について指摘したチェレブニンの研究 (Ⅳ) に記した) ととも一致する（「ーイチ」の内ではクリヴィチが一番早く、ドレゴヴィチ、ラヂミチ、ヴァチチと続く）。そ

そこから東スラヴ語東群へのレッヒ群参与説を導き出した）は古い伝承に頼った可能性が強い（ハブルガエフはその伝承がザルヴィンツィ文化の担い手達の時代から続いてきた可能性について述べている⁽⁵²⁾）。

中央森林地帯は、非常に長期にわたって、ほとんど1000年間バルト人の居住域として安定して来たという。しかもそこに東スラヴ人が入植を開始するのは8～9世紀以後である。そして、セドフによれば、ザルヴィンツィ文化（BC2～AD2）の特徴と古代バルトの特徴とが重なるか接触する辺り、すなわちザルヴィンツィ文化の北限沿いに、概して西バルト語の地名の痕跡があらわれること、それと西バルト語の「過度的」特徴（←本稿(II)）について指摘する言語学の成果とを総合すれば、ザルヴィンツィ文化は、紀元前・後の次期をはさんで古代バルト圏の外れに当たる南・南西部で、スラヴ祖語のかつ西バルト語的な近似・同系の方言を使っていた種族を統合した種族連合体の考古学的反映であるという⁽⁵³⁾。またザルヴィンツィ文化域の南部には古いスラヴの水名があり、そこではバルト、イラン、ゲルマン等の水名が絡まって現れて来るのである。単純化すれば、プリピャチ川とデスナ川が両手で支えるような地図上部（北部）がバルト圏であり、プリピャチとデスナ上流を結ぶ線以南がザルヴィンツィ文化圏である。ザルヴィンツィ文化は民族大移動の時期から南北に分解して、北部は森林地帯奥地に入り、西バルト語方言を保存し、南ザルヴィンツィ人は黒海沿岸ステップ地帯へ移動してチェルニャホフ文化（2～4世紀、北部では5世紀初めまで）に合流したという⁽⁵⁴⁾。そして、6～7世紀になってやっと概ね古代バルト圏以南にスラヴ人遺跡が現れるのである。「ーイチ」に象徴されるバルト系種族の末裔が、年代記の時代にもなおかつ中央森林地帯の奥深く、しかも広大な地域を占めていたことを考えると、東スラヴ語の成立の複雑さは一層明らかである。大ロシア語も含めた東スラヴ語の歴史は決して「系統樹」的な分化を辿る純粋培養の歴史ではなく、北上と南下の異種東スラヴ方言が中央森林地帯に衝突し、さらに「バルトの篩い」を経つつ、多数の種族・民族の混淆、分化、収束の上に成ったものなのである。

〔1000年紀東欧中央森林地帯〕



- B C 1000年紀古代バルト人文化圏
 バルト系水名分布域
 6-7世紀スラヴ遺跡
 8-9世紀ロムヌィ・ボルシェヴォ防備集落分布圏
 9-10世紀スラヴ火葬クルガン(塚)分布図
 クリヴィチ・グルガン南限(中央森林地帯における北部東スラヴ人、南部東スラヴ人接触境界線)
 前期古代ロシアにおける(9-10世紀)バルト人スラヴ化域
 現代東スラヴ方言における[r]~[r']対立境界線
 ザルヴィンツィ文化(BC 2~AD 2)
 チェルニャホフ文化(AD 2~5)
 プシェヴォルスク文化(BC 2~AD 5)
 森林ステップ地帯

(ハブルガエフ「ロシア語の成立過程」第2,6,7図による)

〔注〕

- (1) Ф.П.Филин, Происхождение русского, украинского и белорусского языков, Наука, Ленинградское отделение, Л. 1972, стр. 33
- (2) М.Петер, Историческая грамматика русского языка, 1969, стр. 16
- (3) Н.В.Горшкова, Историческая диалектология русского языка, Просвещение, М.,1972, стр. 12
- (4) В.М.Борковский, П.С.Кузнецов, Историческая грамматика русского языка, Наука, М., 1965, стр. 26-28
М.П.Петер, Истор....стр. 17-18
В.В.Иванов, Историческая грамматика русского языка, Изд. второе, Просвещение, М., 1983, стр. 54-55
Н.И.Букатевич, Историческая грамматика русского языка, Вища школа, Киев, 1974, стр. 43-44
- (5) ヴィザンツ皇帝コンスタンチノス・ポルフィロゲンネートス(コンスタンチノス紫袍帝—日本古代ロシア研究会訳)の著した「諸民族について(Περὶ ἐθνῶν)」(949年)、別名「帝国統治論(De administrando imperio)」の中でドネブル川の早瀬の名称として、'Ὀστροβοὺνίπραχ(Островъ порога)等の記載がなされることをもって、シャフマトフはこれを古スラヴ語の прагъ(ロシア語 порог=早瀬)を伝えたものと考え、スラヴにおける摩擦音的な〔r〕の調音の古さを証明しようとした。しかし、セリシシェフはこの праχの語源を印欧語の *porsに求め(ゲルマン語fors=滝)、*pors→porch→prach—だとしている(スラヴはrに後続するsをchに変え、かつ子音間の〔母音+流音〕結合を開音節法則に従って変形した。南スラヴでは、それをメタテシスによって実現する)。(Г=r)の調音が極めて古いものだとしても、シャフマトフの証明は疑問のあるところである。
- (6) 日本古代ロシア研究会(国本、山口、中条他)、ロシア原初年代記、名大出版局、1987, p.12(底本「ロシア原初年代記全集」第一巻第二版1926年、1962年復刻 Полное собрание русских летописей, Том 1, Из-во восточной литературы, p.12、以下同様に示す)
- (7) Р.И.Аванесов, Проблемы образования языка русской [великорусской] народности, Вопросы языкознания, №5, 1955, стр. 20
- (8) Г.А.Хабургаев, Становление русского языка, Выш. школа, М.,1980, стр. 22
- (9) Г.А.Хабургаев, Становление....стр. 23
- (10) Г.А.Хабургаев, Становление....стр. 25-26
Г.А.Хабургаев, Этнонимия "Повести временных лет", Из-во Мос. ун, М.,1979, стр. 11
- (11) Ф.П.Филин, Происхождение....стр. 49-50
- (12) Ф.П.Филин, Происхождение....стр. 54
- (13) П.Н.Третьяков, Восточнославянские племена, Изд. второе, Из-во АН СССР, М. 1953, стр. 218
- (14) А.А.Шахматов, Введение в курс истории русского языка, Науч. дело, Петроград, 1916, стр. 90
- (15) Памятники литературы Древн. Худ. лит., М.,1987, стр. 418-419
- (16) П.Н.Третьяков, Восточносл....стр. 227-228
- (17) ロシア原初年代記, p.10 (10)
- (18) 同書p.10(p.11)
- (19) 同書p.12(p.12-13)
- (20) 同書p.11(p.11-12)
- (21) 同書p.12(p.13)
- (22) Г.А.Хабургаев, Становление....стр. 89-90

- (23) 国本哲男、ロシア国家の起源、ミネルヴァ書房、1976、p.152-153
- (24) Г.А.Хабургаев, Становление....,стр. 58-59/Этнонимия....,стр. 99
- (25) Г.А.Хабургаев, Становление....,стр. 77-78/Этнонимия....,стр. 99
- (26) Г.А.Хабургаев, Становление....,стр. 79/Этнонимия....,стр. 101
- (27) Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 200
- (28) Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 154-155
ロシア原初年代記、p.30(p.29)p.355
Памятники литературы древней Руси, стр. 45
- (29) ロシア原初年代記、p.12(p.13)
Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 156
- (30) ロシア原初年代記、p.6(p.6)
- (31) 同書、p.10(p.11)
- (32) 同書、p.19-20(p.20)
- (33) Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 221-222
- (34) М.Фасмер, Этимологический словарь русского языка, Том III, Прогресс, М., 1971
- (35) Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 224/Становление....,стр. 90
なお、このことは、「ロシア原初年代記」(日本古代ロシア研究会訳)の巻末に付された綿密な索引によっても(スロヴェネとノヴゴロドの人々、の項)確認できる。
- (36) ロシア原初年代記、p.6(p.6)
- (37) 国本哲男、ロシア国家の起源、p.249
- (38) 同書、p.247-251
Большая советская энциклопедия, Том. 22, Советс. энц., М.,1975, стр. 202
- (39) Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 185-186
- (40) Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 167-168/Становление....,стр. 90-99
- (41) Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 188
- (42) Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 188-189/Становление....,стр. 91-93
- (43) ロシア原初年代記、p.6(p.6)
- (44) 同書、p.19-20(p.20)
- (45) Г.А.Хабургаев,....,стр. 188
- (46) ロシア原初年代記、p.89(p.76)
- (47) Г.А.Хабургаев, Становление....,стр. 95
- (48) Г.А.Хабургаев, Этнонимия....,стр. 194/Становление....,стр. 95-96
- (49) Полное собрание русских летописей, Том 1, Из-во Вос. лит.,М.,1962, стр. 332,417
- (50) ロシア原初年代記、p.7(p.7)
- (51) 同書、p.10(p.10)ハブルガエフは、クリヴィチを東バルト系、ドレゴヴィチ、ラヂミチもバルト系としているが、ヴァチチについては不明としている(Этнонимия...., стр. 196-197)
- (52) Г.А.Хабургаев, Становление....,стр. 97
- (53) Г.А.Хабургаев, Становление....,стр. 57
- (54) Г.А.Хабургаев, Становление....,стр. 58

(1990. 1. 10 受理)